

漢晋の墓制変革

—近年発見の曹魏大型墓をめぐる諸問題—

向井佑介

漢代から晋代にかけて、墓葬制度が大きく変化し、厚葬から薄葬へと転換したことはよく知られている。魏晋の時代に流行した薄葬は、主として墳丘・祭殿など地上施設の省略、墓室構造の簡略化、副葬品の簡素化、という三つの方面にあらわれ、現在までに文献史学と考古学の両面から検証がなされてきた。とりわけ、2008年に河南省安陽において曹操高陵と推定される大型墓が発掘され、その翌年には洛陽において曹休墓が発掘されたことにより、曹魏大型墓の構造・等級・規格およびその副葬品の実態が明確になってきた。

そうしたなか、曹魏明帝の近親者が葬られたと推定される洛陽西朱村一号墓が2015年に発見され、その墓室内から曹操高陵のものと酷似した多数の石牌が出土した。石牌銘文には器物の名称・大きさ・数量などが記され、副葬品に付けて墓中に納めたものと推定された。石牌に記された器物は、衣服や冠、装身具、飲食器、調度品など多岐にわたる。この墓の被葬者については諸説があるものの、石牌銘文に高位の女性が着用する服飾品や多数の玩具、さらに女兒用の履物が含まれることから、232年に夭折した明帝の娘、曹淑の墓とする説が妥当だと報告者は考える。

曹操高陵と洛陽西朱村一号墓から出土した石牌には、葬送車の帳など葬儀に用いる道具類や、葬儀に際して贈られた布帛などが含まれているのが大きな特徴である。そのため、これらの石牌は、葬儀に際して死者にささげられ、柩とともに宮廷から運ばれてきた儀礼具・供物・衣服・明器などの品目をあらわしたものと推定する。本報告では、死者の葬送のプロセスとそれに関係するさまざまな行為を考慮しながらこれらの石牌銘文の内容を検討し、それをふまえて、漢制から晋制への過渡的様相をもつ曹魏の墓制と葬制について考察することにしたい。